

コミュニケーション支援

新年度が始まりました。元号も、これまで慣れ親しんだ平成から令和へと変わりましたね。フレッシュな気持ちで支援にも取り組める気がします。

これまで、発達障害のあるお子さん、特に自閉スペクトラム症のお子さんへの支援方法を取り上げてきました。自閉スペクトラム症のお子さんには、他者とコミュニケーションをとることが苦手な方が多くいらっしゃいます。コミュニケーションは双方向性の行動ですから、相手に表現して伝えてもらうことと相手に伝えて理解してもらうことが必要となります。秩父学園の「なかま」ではコミュニケーション支援の一環として、PECS と呼ばれる方法を用いていますので今回紹介します。自発的なコミュニケーションをとるのが難しいお子さん、言葉では十分にコミュニケーションがとれないお子さんでも、絵カードの交換ができれば使える方法です。

方法

おやつ時間に、欲しいものを獲得するために一枚の絵カード（ここではマーブルチョコ）と交換する練習を例として挙げます。絵カードを言葉の代わりとして、お子さんから自発的な要求を引き出すことを狙いとしています。

●セッティング



- 要求するためのカード
（取りやすいようにカードの裏面にベルクロを付け、傾斜をつけた台に載せてあります）
- お菓子
- お皿

職員2名、対象のお子さん1名で行います。マーブルチョコの実物と絵カードがお子さんに見えるよう環境設定し、お子さんは絵カードを手にとって職員の手へ渡します。カードを受け取った職員は「(マーブル)チョコどうぞ」と言ってマーブルチョコを渡します。このやりとりの中で、絵カードを確実に手渡すよう求められますので、人をしっかり意識できるようにもなります。

- 今回は女性職員がお子さんとやりとりをして、男性職員が後ろからお子さんの行動の促しや修正を行います。
- お子さんがカードを手渡すよう、男性職員が後ろからお子さんの手をとって促します。女性職員にしっかりカードを手渡すことができました。



- 女性職員から「(マーブル)チョコどうぞ」と言われ、カードと交換にお皿にチョコを渡されました。



PECS®ってなに？

アンディ・ボンディ (Ph.D.) とロリ・フロスト (MS.CCC-SLP) によって開発されたコミュニケーション支援システムです。

PECS は独特な代替・拡大コミュニケーションシステムで、1985 年にアンディ・ボンディ (Ph.D.) とロリ・フロスト (MS.CCC-SLP) によってアメリカで考案され、最初にデラウェア自閉症プログラムの自閉症の未就学の児童に実践されたことから始まりました。それ以降、PECS は世界中、年齢関係なく、様々な障がいを持つ（認知、身体、そしてコミュニケーション）沢山の学習者に実践されてきました。

PECS の手続きは B.F.スキナーの著書、Verbal Behavior (言語行動) と応用行動分析の概念がベースになっています。独自のコミュニケーションを教えるために、特定のプロンプトや強化方法が PECS の手続きの中で使われています。また、この手続きにはエラーが起きた時に学習を促進する系統的なエラー修正手続きも含まれています。言語プロンプトは使わないので、すぐに自発のコミュニケーションを教えることができ、プロンプト依存も防げます。

PECS は 6 つのフェイズ（段階）から成り立っており、対象者が一枚の絵カードを“コミュニケーションパートナー”に渡すところから始まります。絵カードを渡されたコミュニケーションパートナーはすぐにその交換を要求として受け取り、要求を叶えてあげます。次に、絵カードの弁別（認識）を教え、そしてどのように文を構成するのかを教えます。さらに上のフェイズでは、対象者は修飾語を使ったり、質問に答えたり、コメントしたりすることを教わります。PECS の最優先の目標は機能的コミュニケーションを教えることです。

研究の中では、PECSを使っている中で発語が出るようになった生徒もいることがわかっています。音声表出機器 (SGD) に移行する方もいらっしゃいます。PECSがエビデンスベースの介入であり、PECSの効果を実証する研究は沢山発表されており、増え続けています。今現在世界中で 150 以上の研究が発表されており、PECSの効果を実証しております。

～ピラミッド教育コンサルタント HP より引用～